

令和6年4月17日

特集展示

「近代日本の書聖 くさか べめいかく 日下部鳴鶴

—鳴鶴書簡新収蔵記念—」を開催します

このたび、彦根城博物館において、みだしの展覧会を開催いたしますのでお知らせします。つきましては、広報についてご高配を賜りますようお願い申し上げます。

記

1 展覧会名称

特集展示「近代日本の書聖 日下部鳴鶴 —鳴鶴書簡新収蔵記念—」

2 会 期

令和6年(2024年)4月24日(水)～6月17日(月) 会期中無休

開館時間：午前8時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）

3 会 場

彦根城博物館 展示室6

4 展示の趣旨

くさか べめいかく日下部鳴鶴(1838～1922)は、近代日本の代表的な書家です。彦根藩士の出身で、明治維新後、新政府の書記官を勤めましたが、明治12年(1879)、42歳の時に、官を退いて書の道一筋に生きていくことを決意します。

折しもその翌年、清国公使の随員として来日したようしゅけい楊守敬(1839～1915)と出会い、彼の所持する大量のひばんほうじょう碑板法帖（石碑の拓本や書の複製品）をもとに書を学び、力強く韻の高い中国・漢魏六朝時代の書を基盤とする自らの書風を確立しました。深い学識に裏付けられた格調高い鳴鶴の書は広く世に受け入れられ、近代随一のうた大家と謳われるまでになりました。

本展は、当館が令和6年3月に鳴鶴直筆の書簡を新たに収蔵したことを記念し、これら書簡と鳴鶴作品とをあわせて紹介するものです。いずれの書簡も80～81歳の鳴鶴が彦根在住の元彦根藩医・なかじまそうたつ中島宗達(1840～?)に宛てたもので、2人の親密な間柄や多忙を極める鳴鶴の様子、老齢になっても衰えない鳴鶴の書への思いが伝わってきます。本展が、鳴鶴の知られざる最晩年の様子や、彦根の地における文化的役割を知る機会となれば幸いです。



5 展示作品

別添リストの9件

6 観覧料

一般 500 円 (450 円)

小・中学生 250 円 (170 円) () 内は 30 名以上の団体割引料金

*他の展示室も併せてご覧いただけます。

7 展示担当者

彦根城博物館 学芸史料課 北野 智也・高木 文恵

(連絡先) 所在地：〒522-0061 滋賀県彦根市金亀町1番1号

電話：0749-22-6100 FAX：0749-22-6520

E-mail：kitano-tomoya@mx.hikone.ed.jp

特集展示「近代日本の書聖 日下部鳴鶴－鳴鶴書簡新収蔵記念－」展示作品リスト

番号	名称	作者	数量	品質形状	制作年代	年齢(数え)	所蔵者および寄贈者
1	孫過庭「書譜」衝立	日下部鳴鶴	1基	紙本墨書	明治13年 (1880)	43歳	個人
2	五字書対幅 「室雅何須大」 「花香不在多」	日下部鳴鶴	2幅	絹本墨書	明治29年 (1896)	59歳	彦根城博物館 (石田承玉氏寄贈)
3	瀧画賛幅	日下部鳴鶴	1幅	紙本墨画	明治～ 大正時代		彦根城博物館 (井戸庄平家伝来資料)
4	文天祥「正気歌」屏風	日下部鳴鶴	6曲 1双	紙本墨書	明治39年 (1906)	69歳	彦根城博物館 (奥村松平氏寄贈)
5	七言詩書幅「青山一角…」	日下部鳴鶴	1幅	紙本墨書	大正6年 (1917)	80歳	彦根城博物館 (日下部暘氏寄贈)
★	6 中島宗達宛 日下部鳴鶴書簡	日下部鳴鶴	1通	紙本墨書	大正7年 (1918)	81歳	彦根城博物館
★	7 中島宗達宛 日下部鳴鶴礼状	日下部鳴鶴	1通	印刷(一部墨書)	大正6年 (1917)	80歳	彦根城博物館
★	8 中島宗達宛 日下部鳴鶴書簡	日下部鳴鶴	1通	紙本墨書	大正6年 (1917)	80歳	彦根城博物館
★	9 中島宗達宛 日下部鳴鶴書簡	日下部鳴鶴	1通	紙本墨書	大正7年 (1918)	81歳	彦根城博物館

★…新収蔵資料

作品解説

作品No. 5 ^{しちごん ししよふく} 七言詩書幅 ^{せいざんいつかく} 「青山一角…」 日下部鳴鶴筆 1幅

大正6年(1917) 80歳

縦 178.3cm 横 95.7cm

当館蔵 (日下部暘氏寄贈)

大正6年5月13日、日本橋俱樂部（現東京都中央区）において、200人を超える鳴鶴の知人や門人が集まり、鳴鶴80歳の寿宴が大々的に催されました。本作品は、その際に会場正面の床の間に掛けられた鳴鶴自詠自筆の書。年齢を感じさせない堂々とした隷書で書かれ、鳴鶴晩年の代表作とされます。

青山一角避紅塵 不汎家湖把釣綸
 頤性半仙期大耄 開筵立夏卜佳辰
 榴華多子如為寿 竹祖添孫自作鄰
 嬖日薰風清景好 稱觴欣笑共同人

〈語句解説〉

^{せいざん} 青山…樹木の青く茂っている山

^{こうじん} 紅塵…①日に映じて赤色になった塵気②厭わしい俗界

^{つりいと} 釣綸…釣り糸

^{はんせん} 半仙…半ば仙人になる

^{たいてつ} 大耄…老人

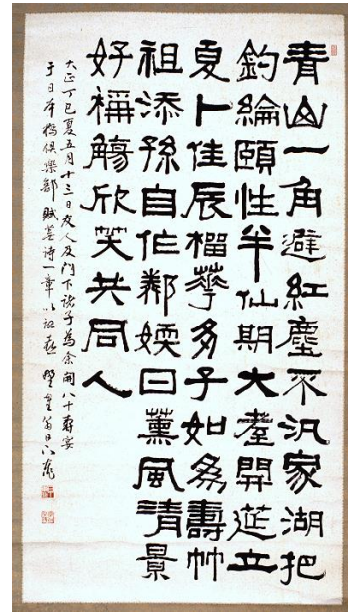
^{かしん} 佳辰…めでたい日、よい日

^{ざくろ} 榴…ザクロ

^{どんじつ} 嬖日=嫩日…あさひ、旭日

^{くんぷう} 薰風…初夏に草木の緑を通して吹いてくる快い風

^{さかずき} 觴…杯



新収蔵資料

作品No. 6 なかじまそうたつあて くさか べめいかくしよかん 中島宗達宛 日下部鳴鶴書簡 1通

大正7年(1918)10月19日 81歳

縦 18.7cm 横 70.6cm

当館蔵

日下部鳴鶴が、彦根で藩医を勤めた中島宗達(1840～?)へ宛てた書簡。この中で鳴鶴は、「八十一歳之高齡ニ躋り、眼昏ク、腕重ク」と吐露し、大作の制作依頼を今後断って欲しい旨を宗達に伝えています。晩年の鳴鶴の心情や体調を具体的に知ることができる貴重な記述です。また、鳴鶴は手製の印譜(鳴鶴の印影を集めたもの)を特別に宗達だけに贈るつもりであることも綴っています。鳴鶴が宗達ととりわけ親しくしていたこと、彼を通じて鳴鶴が自身の揮毫を望む人たちと繋がり、作品制作を行っていたことがうかがえる興味深い資料です。



新収蔵資料

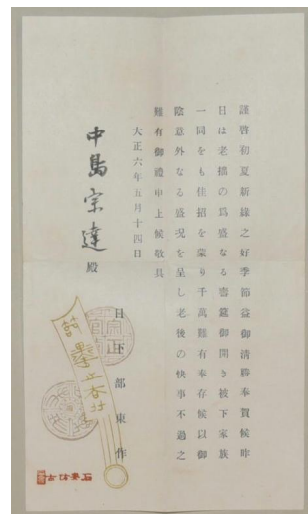
作品No. 7 なかじまそうたつあて くさか べめいかくれいじょう 中島宗達宛 日下部鳴鶴礼状 1通

大正6年(1917)5月14日 80歳

縦 23.4cm 横 13.2cm

当館蔵

日下部鳴鶴80歳の寿宴の発起人を宗達が勤めたことに対する、鳴鶴から宗達への礼状。大正6年5月13日、200人以上の知人や鳴鶴の門人らが日本橋倶楽部(現東京都中央区)に集まり、寿宴が大々的に開かれました。作品No. 5はこのときに披露されたものです。これを機に鳴鶴を会頭とする大同書会が組織され、鳴鶴一門の機関誌『書勢』が発行されるようになります。



新収蔵資料

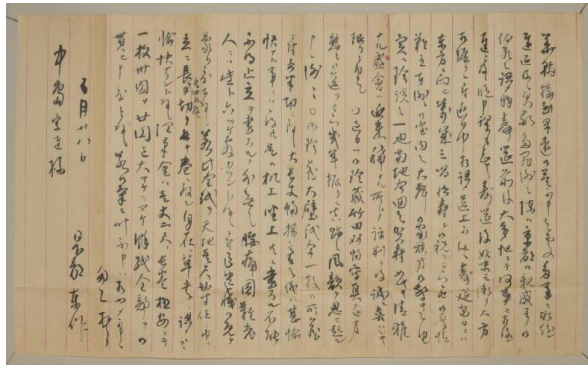
作品No. 8 ^{なかじまそうたつあて くさか べ めいかくしよかん} 中島宗達宛 日下部鳴鶴書簡 1通

大正6年(1917)5月28日 80歳

縦 24.4cm 横 40.5cm

当館蔵

鳴鶴80歳の寿宴に対する喜びや、宗達
が所蔵する絵画の写真を見た感想など
を、鳴鶴が宗達に宛てて綴ったもの。こ
の書簡で鳴鶴は、「雅ナル盛会ハ近来稀
ナル所トノ評判ニ存、誠ニ喜ハシキ限
り」と記しており、宴の盛会ぶりを垣間
見ることができます。また、宗達所蔵の
絵画は、江戸時代後期を代表する南画家
・田能村竹田の手によるもので、作品を
介した鳴鶴と宗達の文化的交流もうかがえる興味深い資料です。



新収蔵資料

作品No. 9 ^{なかじまそうたつあて くさか べ めいかくしよかん} 中島宗達宛 日下部鳴鶴書簡 1通

大正7年(1918)5月22日 81歳

縦 18.6cm 横 70.1cm

当館蔵

宗達所蔵の眞名菘翁(1778~1863)の書などについて、鳴鶴が宗達に宛てて記した書簡。
菘翁は、幕末の三筆の一人として知られ、鳴鶴が私淑した人物でもあります。この書簡
によると、鳴鶴は菘翁の書の跋文と箱の題字の揮毫を宗達から依頼され、菘翁の書を実
見したことがわかります。書中で鳴鶴は、それを菘翁晩年の傑作である般若心経の草稿
と考え、「真率中ニ(正直でかざりけのない中に)無限ノ妙味アリ」と極めて高く評価し
ている点が注目されます。実はこの2年後、鳴鶴は菘翁が楷書で揮毫した般若心経の八
曲屏風の大作を実見する機会を得ます。その際も、それを賞賛したことがよく知られて
います。本書は菘翁の書に対する鳴鶴の並々ならぬ関心と感性を具体的に知ることがで
きる大変興味深い資料といえるでしょう。

